

東海伝統工芸展 染織・人形部会総評

岐阜県美術館

主任学芸員 齋藤智愛

今回、初めて東海伝統工芸会の審査をさせていただきました。このような場に携わらせていただくことは、とても責任を伴うことと痛感しております。

戸惑いながらも審査では技術はもちろんのこと、色彩をはじめ、着物や着尺、帯地など用途別に、また人形でヒトガタに込められた物語の一瞬をいかに表現しているかなど、全体のバランスを注意深く拝見いたしました。個別に見るとともに、審査であるため全作品を比較しながら点数をつけさせていただき、受賞作品を選ばせていただきました。全体を見渡した時、整理された色彩と文様、造形美、確固たる技術力を有する作品はおのずと目がひきつけられました。

染織部会では技術や色彩、文様バランスが整い、安定した作品が多い一方で技術、色、文様の構成など再考の必要性を感じる作品もありました。糸一本、線一本、そして何よりも織りや染めに向き合う姿勢が大変重要になると考えております。それらすべてがそろいピタリと収まった時、均整の取れた作品として結実するのではないのでしょうか。そして美しい型が完成したのちには次のステージへ向けた実験と挑戦が込められた作品を拝見できること、心から期待しております。

人形部会ではそれぞれの方が自身の中にある物語をヒトガタに込められたと思います。人形は360度、どの角度から見られ、審査されるものと考えています。人形の主題選定から、人物が纏う衣装、顔の表情のみならず手や足の動き、指先の細部まで神経をとがらせ、品格を有する造形が求められます。一瞬を切り取ることで、それは容易なことではないと思います。人形が完成したのちも展示に使用する台の素材、色、形を決め、台に人形を配し、顔や身体のふさ

わしい向きを決めなければなりません。最後の最後まで心配りが必要な部門と考えております。

翌日の研究会では両部会ともに多くの方がご参加されたことがとても印象深く、作家の皆様から直接お話をお伺いできる機会があることは貴重なことと思います。公募展とは作家の表現に対する評価の場ではありますが、審査する側である私も「伝統工芸とは、現代とは」を問われる場であると感じました。本展である日本伝統工芸展でも皆様の思いが結実した作品を拝見できますこと期待しております。